

ASHUREY CLASS

2024

受難週の瞑想

No.1 2024.3.24

1. エルサレム入場 ①

【新改訳2017】 マタイの福音書21章1～11節

- 1 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。
- 2 「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばがつなががれていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどいて、わたしのところに連れて来なさい。
- 3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」
- 4 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。
- 5 「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」
- 6 そこで弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、
- 7 ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた。
- 8 すると非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。
また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。
- 9 群衆は、イエスの前を行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。
「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」
- 10 こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、
「この人はだれなのか」と言った。
- 11 群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言っていた。

1. エルサレム入場 ②

●イエシュアの公生涯の三年半、そのほとんどはガリラヤとその周辺を舞台とした宣教でした。しかし、公生涯の最後の一週間は、イスラエルの中心地であるエルサレムにおいての宣教です。その最初の出来事が今回の箇所です。ガリラヤ宣教の記述は三年半で17章分(4～20章)を費やしているのに対して、わずか一週間のエルサレム宣教の記述は8章分(21～28章)を費やしています。

●イエシュアの一行はエリコを出て、エルサレムに近づいていました。過越の祭りのために上っていたのです。エルサレムに着く前に、まずオリーブ山の東側のふもとのベテパゲまで近づいたときです(マルコ、ルカ、ヨハネでは「ベテパゲ」だけでなく、「ベタニア」も加えられています)。イエシュアは二人の弟子に、向こうの村に行って、つながれているろばと一緒にいる、(まだだれも乗ったことのない)子ろばをほどいて連れて来るように言われました。



1. エルサレム入場 ③

●オリーブ山は、エルサレムから東側1キロほどのところにあり、エルサレムより120mほど高い山です。オリーブ山という名が示すとおり、そこはオリーブの木に覆われています。オリーブ山の東側にある「ベテパゲ」は「ベート・パゲー」(בֵּית פַּגֵּי)で、「家」を意味する「ベート」(בֵּית)と、初なりのいちじくの実を意味する「パグ」(פַּגֵּי)の合成語で、「初なりのいちじくの家」です。イエシュアの一行は、滞在先となるベタニアとエルサレムとの間を往復しますが、その滞在先のベタニアにはイエシュアを快く受け入れた者たち(マルタとマリア、そしてラザロ)がいました。これから一体何が起こるのか。イエシュアのエルサレムでの出来事を悟っていたのは、イエシュアの足もとに座ってイエシュアの語ることばに聞き入っていたベタニアのマリアだけでした。なぜなら、彼女はイエシュアの葬りのために香油を注いで塗ったからです(ヨハネ12:1~8)。葬りとはイエシュアが死ぬことを意味します。今までイエシュアについて来た弟子たちとはきわめて対照的でした。

1. エルサレム入場 ④

●今回のテキストのキーワードは「子ろば」(「アイル」^{אֵיל})です。イエシュアが「子ろば」に乗ってエルサレムに入場されるのです。なぜ、「子ろば」なのでしょう。そこに焦点を当ててみたいと思います。

【新改訳2017】マタイの福音書21章1～3節

- 1 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。
- 2 「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばが繋がっていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどいて、わたしのところに連れて来なさい。
- 3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」

●イエシュアの一行がベテパゲまで来たとき、イエシュアは「向こうの村」に二人の弟子を遣わしました。そこに「ろばが繋がっていて、一緒に子ろばがいる」からです。そして、「それをほどいて、わたしのところに連れて来る」というのが、二人の弟子の遣わされた目的です。この二人の弟子の名前は明記されていませんが、マタイでは「二人」という表現が重要なのです。20章だけでも「二人の兄弟」(24節)、「目の見えない二人の人」(30節)が登場します。「二」は証しの数です。

2. 『主がお入り用なのです』 ①

●イエシュアは二人の弟子に、「つながれたろば(=雌ろば)と子ろばを見つけるでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい」と命じました。「もしだれかが何か言ったら、『主が(原文「それらを」)お入り用なのです』と言いなさい。すぐに(原文「それらを」)渡してくれます」となぜ言えたのでしょうか。しかも「すぐに」です。前もって打ち合わせる時はなかったはずなのに、いかにもすでに決まっているかのようにスムーズに事が運んでいくのです。神のご計画と計らいには、予め定まっていて、自然になされることがあるようです。

●イエシュアが子ろばに乗ってエルサレムに入場されたことを、マタイは「このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就されるためであった」として、以下のように、旧約のことばを引用しています。

【新改訳2017】マタイの福音書21章5節

「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。

柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」

●この預言は実は二つの箇所から成っています。その二箇所とはイザヤ書62章11節、そしてゼカリヤ書9章9節です。後者では、子ろばに乗ってエルサレムに入場することがメシアのしるしだと言われています。

2. 『主がお入り用なのです』 ②

【新改訳2017】ゼカリヤ書 9章9節

娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。

見よ、あなたの王があなたのところに来る。

義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろば(「ハモール」 חמור)に乗って。

雌ろば(「アートーン」 יארתן)の子である、ろば(「アイル」 איל)に乗って。

●重要なのは、雌ろばの子である「アイル(=子ろば)」(איל)に乗って来ることがメシアのしるしだということです。「見よ」の「ヒンネー」(הינה)は、「終わりの日」に起こることに目を留めさせる呼びかけの語彙です。「娘シオン」とは「エルサレムの住民」の雅名。ちなみに再臨のイエシュアは「白い馬」に乗って来られます。しかし初臨はイエシュアが「子ろば」に乗ってと預言されています。いずれもメシアのしるしですが、初臨のメシアは柔和な王としてです。マタイ11章29節に「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます」とあります。そのことを示すためにも、**イエシュアは子ろばに乗らなければならなかった**のです。

3. 「アイル」の語彙が持つ意味 ①

●ところで、なにゆえに「子ろば」なのでしょう。「子ろば」は「アイル」(אֵיל)です。同語根の動詞「ウール」(אָוּל)には「目を覚ます」という意味がありますが、同じく同語根の動詞「アーヴァル」(אָוַר)にはその反対の「盲目にする」という意味があります。図にはありませんが、名詞の「イッヴェール」(אֵיבּוּר)には「盲人、盲目」という意味があります。このように「子ろば」には、人を「盲目に」し、同時に「目を覚まさせる」という意味があるのです。

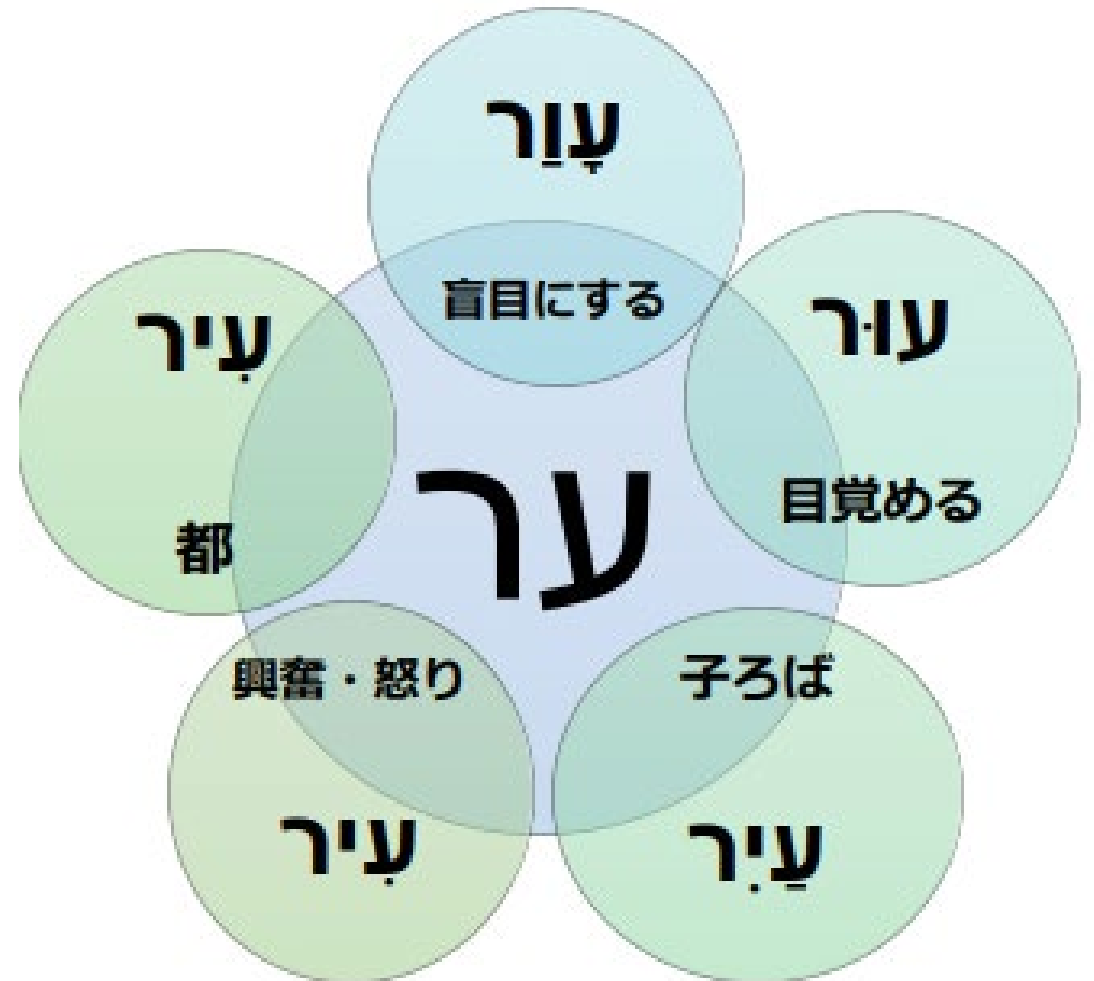
●ゼカリヤ書9章9節が引用される新約の箇所(マタイとヨハネ)には、イエシュアがエルサレムの町に入場する前に盲人の目を開かれるという話があり、同時に、霊的に盲目にされている人々もいるのです。この霊的現実を露わにするために、「子ろば」が登場しているのです。しかもイエシュアが入場するエルサレムの「都、町」を表す「イール」(אֵיר)も、イエシュアがエルサレムに入ることによって都中が「興奮」状態になり、また神殿が汚れているのを見たイエシュアが「怒り」を表す語彙も、同じ「イール」(אֵיר)なのです。

3. 「アイル」の語彙が持つ意味 ②

●ちなみに、何に対して人々が「盲目」にされ、逆に何に対して「目が覚められる」のかといえ、それは「イエシュアこそ預言されていたメシアである」ということに対してです。

●さらに言うなら、イエシュアの「敵」を意味する「アール」(אֵר)も、イエシュアの受難をもたらす重要な語彙です。

●このように、これから展開するすべての状況が、一つの「ペアレント・ルーツ」(親語根/אֵר)でつながっているのです。



4. 「神の定めの時を知らない群衆たち」 ①

【新改訳2017】 マタイの福音書21章8～11節

8 すると非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。

また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。

9 群衆は、イエスの前を行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。

「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」

10 こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、

「この人はだれなのか」と言った。

11 群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言っていた。

●イエシュアがエルサレム入場の際に、「非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた」とあります。いろいろなところから祭りのために集まった人々は、王が通るのにふさわしいように、自分たちの上着を、ある者たちは木の枝を切って道に敷きました。この「敷いた」は未完了形で、それらを「次々にその道に敷いていった」ことを意味しています。そして、「ホサナ」（「どうぞ救ってください」の意）と叫び続けながら、イエシュアをダビデの子として、つまり王なるメシアとして、賛美しつつ、迎え入れたのです。この叫びは神に届かなかったのでしょうか。いいえ、届かなかったのではなく、**神の定めた時ではなかったのです。**

4. 「神の定めの時を知らない群衆たち」 ②

●イエシュアを迎えた多くの群衆は、旧約聖書が啓示している正しいメシアを知っていたわけではありません。自分たちの国を復興してくれる王的な存在としてしか見ていませんでした。つまり彼らは自己本位なメシア像しか抱いていなかったということです。ですから数日後にイエシュアに失望することになるとは、この時点では全く思いもよらなかつたに違いありません。彼らの失望は怒りに一変し、イエシュアは拒絶されるのです。ですから神はもう一度、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」という預言を実現しなければなりません。イエシュアを拒んだユダヤ人に対して、イエシュアはこう言っています。

【新改訳2017】マタイの福音書23章37～39節

- 37 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかつた。
- 38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。
- 39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

4. 「神の定めの時を知らない群衆たち」 ③

●38節の「世界離散」と、39節の「獣と呼ばれる反キリストによる未曾有の苦難を通して、イスラエルの残りの者に恵みと嘆願の霊が注がれて悔い改めの叫びとなる」、その間には2000年以上の隔たりがあります。私たち教会はすでに天に携拳されているため、この大いなる光景を見ることはできませんが、長い間盲目にされてきた神の宝の民であるイスラエルが目覚める時が来るのです。まさにここに、イエシュアが子ろばに乗ってエルサレムに入場される象徴的、および預言的な意味があるのです。

4. 「神の定めの時を知らない群衆たち」 ④

【新改訳2017】詩篇24篇7～10節

7 門よ おまえたちの頭を上げよ。

永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

8 栄光の王とはだれか。強く 力ある主。戦いに力ある主。

9 門よ おまえたちの頭を上げよ。

永遠の戸よ 上がれ。栄光の王が入って来られる。

10 栄光の王 それはだれか。万軍の主 この方こそ栄光の王。セラ

● 「門」と「戸」(扉)に対して、「上げよ」「上がれ」と二度も命じられています。二度命じるのは強調表現です。しかも、呼びかけられている「門」と「永遠の戸」はすべて複数形です。これらが意味しているのは、おそらくイスラエルの民、つまりシオンの娘(=イスラエルの残りの者)のことだと考えられます。なぜなら、王が支配する国には、その王に従順に従う民がいなければならないからです。それゆえ、「門よ。おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる」と預言的に語られているのです。

今回の瞑想のまとめ

- 「力ある栄光の王」「万軍の主」に対してイスラエルの民ができることはただ一つ、「**上げる**」ことです。つまりそれは**神に立ち返ること**です。それ以外のことは求められていません。「上げよ」と命じる動詞は「ナーサー」(נָסַר)です。ここでは、「ナーサー」(נָסַר)の基本形の命令形「上げよ」と、受動態の命令形「上げられよ」(=身を起こせ)となっています。特に「ナーサー」の受動態の意味は「荷を負われる」ことから「罪が赦される」という意味になります。王なるメシアがエルサレムに入るためには、神の民の背信の罪が赦されることが前提です。そのために、御霊とも言える「人称なき存在」が、神への立ち返り、悔い改めを呼びかけているのです。
- このことは、イスラエルの残りの者だけでなく、私たち異邦人にも呼びかけられているのではないのでしょうか。